

としました。そこで、膠で固着して居るのを無理に脱がせたもんですから、帽子の皮だけが脱れて、中の方は、矢張頭について残つて居ましたから、『オヤ〜』といつて諦めましたと云ふ。

なさけない

お婆さんが、川へ菜と酒とを洗ひに行きました所が、大水が出て来て、二つとも流されましたので、ナサケナイと言つて泣きました。

いそつぶ物語

(五十五) 百姓の親子

一人の百姓が死際になりました、どうか子供等にも自分と同じ様に精出して畑を耕作す様にさせたいものだと思へまして、さて、大勢の子供を枕元に呼びよせて次の様に咄しました。

「已は、お前方には誰にも知らさないで、家の畑の中へ、非常な寶物を埋めて置いたから、お前方誰でも掘り出したものに、形見として上げよう」と云ふ言置きをして死にました。其處で、子供等は、吾こそ其寶物を掘り出さうといつて、各自、鍬や鋤を以て来て、丁寧に畑を、あちらこちらと掘り返して見ましたが、何一つ寶物らしいものが出ませんでした。然しながら、其お蔭で、其年の作物は非常な豊作でありましたと云ふ。

(五十六) 雞と鷲

二羽の雄雞が、或日、畑で以て烈しく蹴合を始めました。そして、終に一羽の雞が勝つて、一羽の雞は小さくなつて、片隅へ隠れました。そうすると、此勝利者は、高い垣根へ飛び上つて、兩方の羽をたゝいて、力一杯に勇ましく凱歌ひました。

所へ一羽の大鷲が、風を切つて舞ひ下つたと思ふと、忽ち此勝利者を爪に引つ掛けて、再び虚空遙に飛び去りました。

傲慢の後には滅亡が來ます。

(五十七) 狐と猿

或時、森の中で獸の集會がありました。其席上で猿が、いろ／＼の藝當をして多勢の獸どもを喜ばせました所から、とう／＼皆が、相談をして猿を獸仲間の王様にする事に決めました。すると、狐が猿の名譽を嫉んで、或晩、係蹄に一片の肉のかゝつて居るのを見付けて來て、そして猿に申しますには、『私は、今御馳走を見付けて來ましたが、先づ王様に上げたいと思ひまして食べずに置きましたから、どうか、一所に來て食べて下さいませ』そこで、猿は『そうか、それはありがたい』

といつて、其場所へ行き、何の氣なしに食べようとして忽ち係蹄に引つかつて仕舞ひましたから、非常に怒り出して、何故人を欺かして、こんな目に遭はした、さあ承知しないといつて、狐に食つてかゝりますと、狐は、片頬に微笑みながら、『オイ猿さん、君は、そんな氣で居て、吾々獸社會の王にならうなんて、とても柄にないじゃないか』

(五十八) 腹と手足等

或時、人間の手や足や目や口等が、腹に向つて不平を鳴らしました。一體、腹といふ奴は、怪しからぬ。日がな一日何もしないで遊んで居て、そして、一人で甘いものを食つて贅澤を極めて居る、吾々が、毎日働いて、彼の爲に汗水になつて働いてやるのは如何にも馬鹿らしい話でないか』といふ

ので、とう／＼皆が全盟罷工をやつて一切身體を助けないことに決めました。所が、忽ちにして全身、衰弱に陥つて仕舞ひました。そこで手や足や目や口等が、あゝ馬鹿なことをしたといつて、後悔しました。もう、後れしました。

はととぎすはととぎすぎすぎすぎすに

まづまのわれにはつねきかせよ、

### 閉塞隊勇士の行状

眞個に大事業を成し遂げようとする人に限つて、平生の行状は屹度立派なのが多い。平生、亂暴をやつたり、禮儀などを構はない様な人は、大抵はさういふと云ふ場合に大きな事業は出来ないです。其證據は、今度の我海軍閉塞決死隊の人々の平素の

行はどうかといふ事につきて、或る士官の申されましたには、皆沈着にして禮儀を重んじ、かりそめにも軍隊の規律などを犯す様なのはなく、海軍では行状は四等に別れて、一番宜いのを一等として居るが、多くは皆一等の行状點を持つて居る人たちで、酒を飲んで亂暴をしたり、肩を張り、臂を怒らして人と衝き當つて喧嘩をする様な連中は一人もなかつたといふ事です。そして、此任務を果すに付きては、一生懸命職務に勉勵した事は勿論ですが、任務を終へて歸つて來ても、決して、自分たちの功を誇るといふ風はなかつたといふ事です。まことに感心な話ではありませんか。